

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 覚張シルビア

覚張シルビア氏の論文「レフ・トルストイの作品における意識の境界状態の心理描写」は、「意識の境界状態」にトルストイ文学を読み解く重要な手がかりを認めてその描写を具体的かつ詳細に分析し、さらに「意識の境界状態」を「自然状態と社会状態の対比」という視点から統一的に捉えようとしたものである。

レフ・トルストイ（1828-1910）は19世紀ロシア文学を代表する作家であり、日本でも長い受容の歴史がある。世界的にも数多くの先行研究が存在しており、新たな研究成果を加えるためには独自の視点と多大な努力が必要である。覚張氏の論文は登場人物が精神的次元で生から死へ、死から生へと移行するプロセスを「意識の境界状態」と名づけ、これをトルストイの自然観と結びつけて解釈するという、既存の研究に見られなかった視点を導入しており、トルストイ文学に対する新しい理解を提供するものである。

本論文は序、結論と本論三章から構成されている。まず本論第一章では、『幼年時代』、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』等代表的作品が取りあげられ、登場人物の内面が夢、死を含む様々な危機的状況においてどのように変化しているかが分析されている。

「神」あるいは外界の秩序としての自然との融合を通して初めて主人公たちの精神的復活が実現するとの、指摘がなされている。第二章では女性登場人物における精神的死と復活の描写の分析が行われ、またトルストイとほぼ同時代の作家、ドストエフスキーとチェーホフの作品に見られる精神的危機の描写方法との比較考察が行われている。これら二つの新たなアプローチを導入することによって、「意識の境界状態」を描写するトルストイの手法上の特徴がより明確なものとなっている。第三章ではそれまでの作業の補足として、危機的でない状況における登場人物たちの精神的傾向にも目が向けられ、彼らが自らの自然的本性と外部の自然ともいべき「神」との合一を経験するプロセスが考察されている。トルストイがルソーの自然観に深く影響された点についても紹介がなされている。

本論文はレフ・トルストイの文学を既成の作家像を通して理解するのではなく、描写の具体的細部に依拠して作家の創作方法を明らかにしようとした極めて意欲的な仕事である。また、単に個々の手法上の特徴の指摘に留まるのではなく、それらを体系的に理解することによって作家の世界観を解明しようとした点も評価できるであろう。

審査の過程では、<より多くの他作家との比較研究やルソーとの関係の分析を深めることによって、考察を充実させることが可能だったのではないかと>との意見が出された。しかしこの指摘は本論文の本質的な欠点を意味するものではなく、むしろ覚張氏の研究に対する期待の大きさを示すものであったと言える。以上のような評価に基づき、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位に充分値するものであるとの結論に至った。